

震災復興に私たちはどう関わるか —被災地を訪ねて見たこと、考えたこと—

気仙地方、JICA二本松訪問：2011年4月20～22日

グロ文緊急セミナー

2011年5月9日

内海成治・熊谷圭知

小田隆史・新井杏子・成田矩子

調査の目的

- 現地の様子を実際に見る：何が起きたのか、何が行われているのか？
- 被災地の市民、行政、教員、ボランティア、NGO、援助機関の人々の話を聞く
- 私たちに何ができるかを考える機会とする
- 今後の活動・調査・研究の拠点を検討する

気仙沼市街①



気仙沼市街②



気仙沼市教育委員会 及川先生



気仙沼市現状



市教育委員学校教育課副参事

及川幸彦先生

- 気仙沼市公立学校：
翌日(4月21日)から再開
- スクールバス、給食
- 子ども、教員にも被害
- 震災被害の温度差
- 支援の申し出一本化してほしい

死者910名、行方不明679名(人口7万強)

5月2日現在

地震・津波・火事

主産業＝水産・観光業

外部から気仙沼への支援

気仙沼ボランティアセンター（3月28日開設）

- ボランティアとニーズのマッチングを行う
- 派遣、オリエンテーション、効率よく/HP充実

運営：気仙沼市社会福祉協議会＋応援、NGO

- ニーズ発掘（在宅避難者など）
- ボランティアへのケア
（活動地調査）
- 援助調整機関
- スタッフへの支援



外部から気仙沼への支援②

peacewinds JAPAN 一関事務所

- 96年より活動する国際協力NGO
- 地震発生から2週間:物資、食糧などのニーズ調査と調達

復興へ向けた3つの柱事業

1.岩手県内の仮設住宅2万世帯への生活物資(日用品)配布

2.心のケア

各避難所と交渉し、ニーズを見てアプローチ

3.経済復興、支援優先家庭への支援

地域振興券、物資の移動販売、漁協支援

仮設住宅入居後は、避難所に配布される物資を取りにいきづらい

- 海外での支援との違い
- PWJは今後2年間事務所を継続予定



Peace Winds JAPANでの聞き取り

気仙川を遡った津波



壊滅した市街地の風景①



被災した家屋



壊滅した市街地の風景②



避難所・仮設住宅(高田一中) 市役所仮庁舎



陸前高田市長・戸羽太氏

- 「阪神大震災や中越地震経験者からのアドバイスが役に立たない」⇒津波：全く異なる災害
- 市長自身が奥さんを亡くされる⇒「遺体が見つかっただけで喜び」というように「感覚が麻痺している」
- 復興構想委員会＝「目的が見えてこない、皆言うことが違う」
- 復元ではなく、ゼロからの復興（昔の陸前高田のイメージから抜けきれないが、頭を切り替えて、若い人が住める街をめざしたい）



・地元を知らない)外部の人たちが、いろいろなオルタナティブを出してほしい

M.Kさん(60代)

- 数年前に市役所を退職
- 家と車3台を流されたが、夫婦で辛うじて逃げのびる
- 300万円で瓦を修理したばかりの家、50万円の売り上げを積んだ車、15万円のアユ釣りの釣竿を流す
- 明治の大津波の経験⇒逆に「こんなところまで津波が来るとは誰も思わない」ということに…



- 避難所にいる中で、テレビが見れず、東京の人より情報が少ない
- 岩手県の対応は早かった(函館の霊柩車を送る…など)
- 散髪ボランティア、有り難かった

大船渡市



岩手大学マンドリンクラブOB・OG の老人ホーム慰問演奏



内海先生の息子さんが所属なさっている
マンドリンクラブの慰問演奏を見学。

社会福祉法人 地域密着ケアホーム 「平」(ひら) K.Kさん

- 仕事場にいるときは気を張っている
- 最初の1カ月は無我夢中だったが、癒されるものも必要
- 「上を向いて歩こう」を聞いて涙が出た
- 原発などの事件があると(津波の被災地は)忘れられてしまう／ずっと発信してほしい



碓石海岸の自宅は流されてしまう
「いつもだったらきれいなところがたくさん
あって案内したいのだが…」



JICA二本松

- JICA(国際協力機構)青年海外協力隊訓練所
→福島県の要請を受け3月14日より避難所
- 避難者数:199名(4/22現在) 最高時453名
- 大量の物資援助
→「必要な時に必要なもの」必須
企業からの迅速な支援
例)ユニクロ、ベネッセ



避難所運営の特色



- 住民自治組織

- 3月19日夜に住民参加型ワークショップ実施

- グループ単位で課題発掘

- 例) クリーンアップキャンペーン

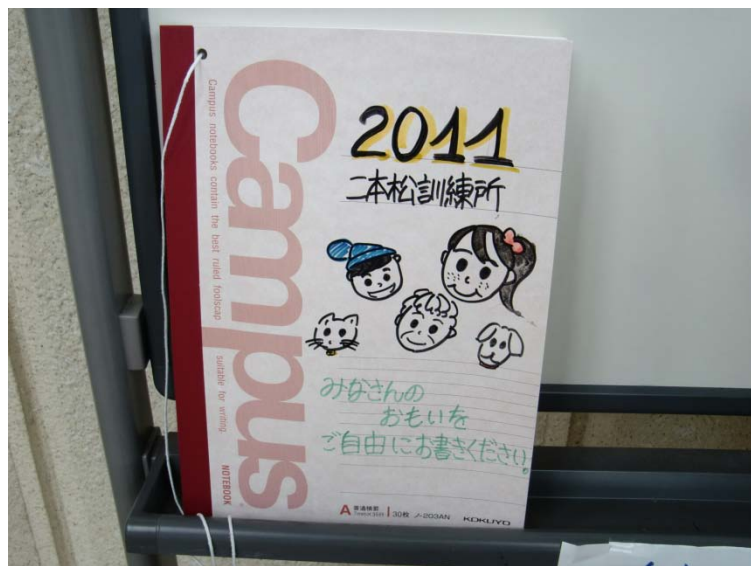
- JOCV(青年海外協力隊)隊員・OVのスキルの活用



クリーンアップキャンペーンの報告



支援国からのメッセージ



個人感想



新井の感想

- ニーズ
「現場でさえ、まだ見えない」
「一元的に全体を見る誰か」
- “これから”
「やっと学校が再開して、これから」
「復興に関しては、これから」
- 人との出会い

成田の感想

- 「理想を掲げ、その一方で地を這い働く」
- 「被災者」であることはその人の一部

小田の感想

- 舵取りを誰がどう行うか？
- バランスが問題（支援する側と地域のミスマッチ、見過ごされている場所がある）
- 「地元の意見を尊重して汲み上げる」だけでは 不十分⇒地域の持つ優位性・劣位性によってあるべき支援・資源の偏在が生じてしまう
- 自分の目で見て肌で感じたことを踏まえて、今後 被災地のステークホルダーと対話していきたい

熊谷の感想

- ①「悪夢」・「不条理」という実感／どう向き合うか
- ②被災地の地域差：臭いの違い：気仙沼＝（火事で燃えた）油の臭い／大船渡＝魚の（腐った）臭い／陸前高田＝何も臭いがしない
- 大船渡・気仙沼は産業基盤の復興が課題／復興を構想する心情的基盤（生活世界、原風景）さえ失った陸前高田
- ③「被災地」・「被災者」＝均質な存在ではない
- 家族や家や風景を失うという体験とそれによる喪失感・剥奪感⇒理性的・集合的な経験に還元できない
- ④被災地の復興＝経済的・工学的な次元が優先されて進行することへの危惧
- ⑤個人（ミクロ・レベル）の経験に寄り添うことの大切さ／と同時に（マクロ・レベルでの）復興の構想に寄与することをどう折り合わせるか？

内海の感想

- 地球が生きていることを実感した
- 新しい市民社会論が必要→地球との共生
- 私たちが被災した人々の話を聞くことは無意味ではない→被災した人にとって外部の私たちに語ることは大切なこと
- 知のボランティアの必要性→pro bono（専門的支援）よりも、身体を含め、関わりを深めたライフワークとしての関係性の構築